

A ブラックバス(オオクチバス)

どうやって日本にきた 食用にするため
 オオクチバスはもともと、食用などにするために、1925年に芦ノ湖に放流され、そのあとにも山中湖などいくつかの湖に放流されました。1945年にアメリカ軍が進駐すると、兵士がこの魚を釣るようになって、さらに放流される場所が広がり、日本人の間でもバス釣りが流行するようになりました。湖や沼に放す人も出てきて、すむ場所が全国に広がりました。

どんな生物? バス釣りの流行で放流され 全国に分布が急拡大
 北米が原産地の口が大きな魚で、ブラックバスの1種です。1925年、釣りや食用目的で神奈川県芦ノ湖にはじめて放流されました。バス釣りブームによる放流・無断放流で、その後30年で生息域がさまざまに拡大。特定外来生物に指定される前に、全国に分布しました。ダム湖や天然の沼や湖、小さなため池、河川の中流から下流などにすんでいます。水生昆虫や甲殻類、オイカワやヨシノボリなどの魚を食べるほか、共食いもします。

オオクチバス (ススキ目サザナギ科)
Micropterus salmoides
 ▲全長30~50cm ▲北アメリカ ◆日本全国; ほぼ全世界 □緊急対策外来種 ★在来魚の捕食。



なぜ害が出る どん欲で敵がいなし
 オオクチバスは、大きな口で魚などをいっしょに飲みこんで食べます。ザリガニも好きで、飲みこんだあとに口の中をかみつぶして食べます。このような食べ方をする魚は、日本の湖や沼にはいませんでした。



▲モツゴを飲みこんだオオクチバス。

バランスがとれた日本の生き物の世界に入れないオオクチバス
 オオクチバスは、日本では最終捕食者でありながら、ふえやすい魚なので、放された湖などでは爆発的にふえます。湖にいる在来種は新しくあらわれた敵に食べられて、すぐにへってしまいます。湖がオオクチバスだらけになると、ほかに食べる生き物がいなくなるので共食いも起こり、オオクチバスもへっていきまします。その結果、少しのオオクチバスと少しの生き物しかいない、バランスがくずれた湖になってしまいます。



①オオクチバスが放される。 ②日本の生き物を食べる。 ③日本の生き物がへる。
 ④オオクチバスだらけになる。 ⑤オオクチバスが共食いをする。 ⑥少しのオオクチバスと少しの生き物しかいない。

どのように対策をとる つかまえる・水をぬく
 オオクチバスだけをつかまえることが大事です。以前はキャッチ&リリース(釣ったあとに魚を放す)が行われていましたが、現在は禁止されているところがあります。小さな池などでは、水を全部ぬいて魚をとらえ、オオクチバスなどの外来種をとりぞいで、在来種だけを池にもどすことも行われています。

じつはおいしい!
 水のきれいな場所のものは、フライや天ぷらに向いている。

ブラックバスを食べる
 ブラックバスをさかんに捕まえている琵琶湖などでは、ただ防除するのではなく、捕まえたブラックバスを料理して食べることもしています。ブラックバス天丼やブラックバスバーガーなどメニューはいろいろ。外来生物であってもその生命を無駄にしない取り組みのひとつです。




▲水がぬかれた池 (秋田県雄勝郡)

▲とりのぞかれた外来種。

どんな害? 生態系に広く悪影響 北海道では根絶に成功
 肉食性で、在来の魚を食べつくす勢いで、希少なゼニタナゴ、ジュスカケハゼ、シナイモツゴをっそり減らします。多くの水生生物や甲殻類を食べ、それらを食物にするほかの生物の生き残りもおびやかすなど、生態系に広く影響をおよぼします。全国各地で池を干す、稚魚をすくう、網を張るなどの対策をしています。北海道では電気ショッカーによって、水中に電流を流し、一時的に魚をまひさせてつかまえました。2007年に根絶が宣言されました。

水中に強い電流を流すと、魚が気絶して浮かんでいきます。浮かんだ魚のうち外来魚を、網ですばやく捕まえます。

【出典】 書名 / 出版社名 / 出版年 / 掲載ページ
 『学研の図鑑 LIVE 外来生物』/学研/2022年/26P,29P
 『外来生物のひみつ』/PHP研究所/2018年/40P
 『外来生物ずかん』/ほるぷ出版/2018年/111P

A セアカゴケグモ

どうやって日本にきた 建築資材などにまぎれて
 セアカゴケグモは、最初に発見された場所と同じような港近くの貨物おき場などで多く見られるため、船で運ばれてきた建築資材などにまぎれて侵入しつづけているようです。また、それらの場所から自動車で運ばれて、国内の各地に分布を広げていると考えられています。



▲セアカゴケグモのめすと、卵のう(ボール形のもの)。おすは体が小さく、さばも小さいので、かまれる心配はほとんどありません。

なぜ害が出る めすが毒をもっている
 小型でおとなしいクモですが、めすが神経毒をもっていて、人にかみつくこともあり、危険です。ブロックやフェンスのすきまやふたがついた側溝、エアコンの室外機や自動販売機の下など、暗い場所にすみを張ってすんでいます。おとなしいクモですが、側溝そうじなどであやまって強かさわってしまった場合に、かまれて被害が出ます。

駆除の失敗
 発見以来、なんとか駆除できないかと検討されました。しかし、セアカゴケグモの成体には殺虫剤がきくものの、卵にはあまりききません。そのため、大量に殺虫剤をまいても、ほかの虫を殺してしまうばかりで効果はうすく、見つけたらふみつぶすか、焼くなどの地道な処理を続けるしかありませんでした。こうした処理ではなかなか駆除は進まず、発見がおそかったこともあり、2016年には42都道府県で生息が確認されるまで分布を広げてしまったのです。

毒の危険度は?
 セアカゴケグモはクモのなかでは最強クラスの神経毒をもち、オーストラリアでは人がかまれて死んだ例もあります。それまで日本には人間が死ぬような強い毒をもつクモは生息していなかったため、セアカゴケグモは殺人クモとよばれておそれられたのです。ただし、強い毒をもつのはメスで、オスの毒は人間に害をあたえるほどではありません。しかも、セアカゴケグモの性格は攻撃的ではなく、人間が近づいても、まずは死んだふりをしてやりすごそうとするほどです。実際にかまれた状況というのは、ヘルメットのなかにクモが入っているの知らずにかぶってしまった、クモをふみつぶそうとしたらズボンのなかに入ってきたなどです。セアカゴケグモは、スズメバチとくらべても危険度はそれほど高くありません。

セアカゴケグモ (クモ目ヒメグモ科)
Latrodectus hasselti
 ▲体長めす7~10mm、おす4~5mm ▲オーストラリアと考えられている ◆本州、四国、九州、沖縄諸島; ヨーロッパ、北アメリカ、東南アジア、ニュージーランドなど □緊急対策外来種 ★神経毒をもち、めすにかまれるとはれる。

90年代に流入した毒グモ その後、各地で発見
 オーストラリアが原産地と考えられている毒グモです。おそらく貨物や建築資材などにまぎれて持ちこまれ、1995年11月に大阪府ではじめて見つかりました。その後は、全国各地で発見されており、定着してしまいました。がけや岩の下のくぼみ、港湾の建物近く、市街地やみその内部、駐車場や墓石の下などに生息して網をはり、落ちてきた虫などを食べます。夏に、50~200個の卵が入った袋のような卵のうを、一度に7~8個産みます。

丸いおなかと細長いあしをもつ、ゴケグモというグループのクモのなかまです。「ゴケ(後家)」とは、夫と死に別れた女性を意味します。ゴケグモはメスのほうが体が大きく、メスは交尾が終わると相手のオスを食べてしまうという説から、名づけられました。

どのように対策をとる 絶対にさわらない
 見つけたときには、絶対にさわらないようにしましょう。クモ用の殺虫剤をかけたり、熱湯をかけたりして駆除できます。

どんな害? 死亡例もあるため、直接さわらず殺虫剤を
 おとなしいクモですが、メスに筋肉をまひさせるなどの毒があり、注意が必要です。かまれると痛みやばき気、めまいなどが起こります。ふつうは数時間から数日で症状が軽くなりますが、海外では死亡例もあります。駆除する場合、直接さわらずにつでふみつぶす、熱湯をかける(洗い流さないよう注意)、卵ごと巣を取りのぞく、よく使われるピレスロイド系の家庭用殺虫剤(人に対し毒性が低く環境にやさしい)をふきつける、といった方法が効果的です。

【出典】 書名 / 出版社名 / 出版年 / 掲載ページ
 『学研の図鑑 LIVE 外来生物』/学研/2022年/79P
 『外来生物のひみつ』/PHP研究所/2018年/52P
 『危険生物・外来生物大図鑑』/あかね書房/2017年/28P
 『外来生物はなぜこわい?②』/ミネルヴァ書房/2018年/11P